

# 「日本リアリズム写真集団」序説

## ——その歴史の実態と方法論的再定義

李 範根

### 目次

0. はじめに
1. 先行研究の現状——日本写真史の圏外としての日本リアリズム写真集団
2. 日本リアリズム写真集団の歴史の実態について——1963年-1979年を中心に
3. 「日本リアリズム写真集団」研究のための論点について
4. おわりに

〈主要参考文献〉

〈資料集：リアリズム機関誌1号-45号：政治への関わりを中心に〉

### 0. はじめに

本論で取り扱う日本リアリズム写真集団（Japan Realist Photographers Association、以下「写真集団」と略記）は1963年12月27日に創立され、現在に至るまで存続している写真団体である。これほどまで長期に亘り存続している団体であるにもかかわらず、学術的な写真研究の領域においては、「写真集団」がまともに論じられることはなかった。本稿では、そのような現状に対する批判的認識の上、「写真集団」の歴史の実態の確認を試みるとともに、同集団を考察する際に必要な論点を提示することを、目的とする。

### 1. 先行研究の現状——日本写真史の圏外としての日本リアリズム写真集団

「写真集団」について論じるために、まず触れておかなければならないのは、戦後日本写真史において「リアリズム写真運動」と呼ばれる時代現象である。この現象を生成させ、牽引していたのは写真家・土門拳（1909-1990）であった。彼は写真雑誌『カメラ』を舞台に、「カメラとモチーフの直結」と「絶対非演出の絶対スナップ」というスローガンを掲げ、アマチュア写真家に向け、周囲の生活を捉えることを呼びかける。それに多くのアマチュア写真家が反応するようになり、リアリズムをめぐる言説と写真実

践が、流行現象のごとく見られるようになる<sup>1</sup>。しかし、こうしたリアリズムのブームは、50年代半ばに入ると徐々にかつての勢いを喪失していく。そしてその後は、社会的現実の客観的な視覚化を写真表現の特徴とする土門流のリアリズムとは異なり、より写真独自の映像表現を試み、社会的現実を主観的な観点から捉えようとする奈良原一高や川田喜久治、東松照明など、いわゆる「戦後派」の活動が、写真界の注目を集める出来事としてスポットライトを当てられるようになる。従来の写真史では、このような歴史的経緯を踏まえ、リアリズムを50年代前半から半ばまでの時期における支配的写真表現として締めくり、その後においては、「戦後派」の活動を取り上げるなど、新たに影響力を示している写真表現を紹介していく。そしてその後についても、時系列に沿って写真表現のパラダイムが次々とシフトしていく様が、写真の歴史として描かれるのである<sup>2</sup>。

このような歴史記述のあり方は、写真史を表現変遷の通史として外観するための見取り図を提供している点で意義を持つ。ただし、注意しなければならないのは、このような歴史の書き方は、ともすれば、特定の写真表現の実践が、支配的な影響力を喪失した後においてもなお、以前とは異なった形で持っていたのかもしれない独自の「歴史」を、不可視なものにしかなないという事実である。

本稿で取り扱う「写真集団」も、これまでの写真史においては、不可視な存在にされがちであった。「写真集団」が創立した1963年といえば、リアリズムの全盛期である1950年代の前半から10年ほど離れているわけであるが、写真表現の変遷過程としての写真史においては、リアリズムの時代は1950年代で幕を閉じているため、1960年代においてリアリズムという語を冠した「写真集団」のための居場所が、その中において用意されることはなかった。もちろん、写真史において「写真集団」に関する言及が全くなかったわけでは決してない。リアリズム写真運動の牽引役である土門拳が、1965年に「写真集団」を主な聴衆として講演会を行っていたこと、そして1966年には同集団の顧問に就任したという経緯が説明される際に「写真集団」は言及されるが、それは土門拳という一人物の情報を補足するために、「写真集団」が取り上げられるだけのことであった<sup>3</sup>。このように「写真集団」は、もっぱら50年代のリアリズム写真運動や当時の土門拳の活動を振り返るための補足資料として取り扱われるという具合で、写真表現の変遷史という歴史記述においては、いつまでも50年代のリアリズムというチャプターの中に留まる

<sup>1</sup> 戦後の土門拳におけるリアリズムの追求について、彼の写真雑誌での活動を中心に示した研究として、岡井耀毅『土門拳の格闘——リアリズム写真から古寺巡礼への道』成甲書房、2005年を参照。

<sup>2</sup> 飯沢耕太郎の『戦後写真史ノート 写真は何を表現してきたか』（岩波書店、2008〔中央公論新社、1993年〕）は、戦後写真の歴史を、表現の変遷過程として本格的に体系化した著作である。ここでは1945年以後の写真表現の歴史を、「Ⅰ. 戦後写真の出発 1945～1955」、「Ⅱ. “戦後派”の登場——VIVOの時代 1955～1965」、「Ⅲ. “私”と“他者”へのまなざし 1965～1975」、「Ⅳ. “世界の中心”の喪失 1975～1990」、「Ⅴ. 写真表現の現在 1990～」といった5つの時代区分を設けて示している。飯沢は「この10～15年ごとの区切りは絶対的な意味を持つものではない」と言いながらも、このような時期区分を設けた理由として、「それくらいの時間の幅で見ると、戦後写真の質と内容の変化が、くっきりとした“風景”の違いとして見えてくるのではないか」と述べ、その意図のもとで、写真表現の変遷過程を、通史として立ち上げさせている。

<sup>3</sup> たとえば、飯沢耕太郎、前掲書『戦後写真史ノート 写真は何を表現してきたか』pp.46-48.

存在にほかならなかったのである。

このような傾向は、写真史の記述の仕方のみ限定されるだけではない。実は土門のリアリズムを取り扱った個々の学術的写真研究においても、「写真集団」は研究の対象としては圏外に置かれていた。それらの写真研究は、写真表現の変遷過程としての写真史の歴史記述と歩調を合わせるかの如く、リアリズムの射程を、主に1950年代か、あるいは、土門という個別の写真家に還元してしまうのである。しかしながら、本稿で「写真集団」の活動を確認することによって明らかとなるように、実は写真におけるリアリズムは、1960年代以降においても特別な存在意義を有していたのであった。

## 2. 日本リアリズム写真集団の歴史の実態について——1963年—1979年を中心に

上記の現状を踏まえ、本節では写真史や写真研究においてはほとんど取り上げられていない「写真集団」について、創立の経緯をはじめ、展開していた事業や体制、会員活動などを確認することにより、同集団の歴史の実態を浮き彫りにしたい。対象とする期間は主に、1963年から1979年までの16年間である。その理由は、1)「写真集団」の活動を確認するための1次資料にあたる同集団の機関誌が、45号が刊行された1980年2月以降、それ以前とは急激に体裁が変わる（詳細は、2. 4. 活動事業概略：主な事業についてのうち、機関誌の項目にて言及）、2) 45号が実質的には79年までの集団の活動を対象としているため、1号—45号が、60年代から70年代までという時代の節目にも相応するからである。

### 2. 1. 創立の経緯をめぐって——その中心としての田村茂

まず「写真集団」がいかなる経緯により創立に至ったのかを確認することから、同集団の歴史の実態へ迫ることとしよう。その際、手がかりとなるのは、同集団で長年委員長を務めた人物であり、土門の親友でもある写真家・田村茂の活動である。

北海道の札幌に生まれた田村茂（本名は田村寅重、1906—1988）は、戦前からファッション写真と報道写真の領域で活動をしていた写真家である。戦後は、商業的写真を撮りつつも、「デモや集会に行くとき必ず田村がいる」<sup>4</sup>といわれるほど、社会の問題が争点化される場所を撮影した。彼はその記録としての写真を、労働系の雑誌や総合雑誌などに発表することで、社会的現実における様々な矛盾や葛藤のありかを視覚的に伝えようとした。なお、彼は土門のリアリズム写真運動にも共鳴しており、自らもリアリズムを追求するようになる<sup>5</sup>。そして1951年の三越従業員組合のストライキをはじめとする各種の労働争議、また九十九里浜や砂川などでの基地反対闘争、さらには筑豊の炭鉱労働

<sup>4</sup> 田村茂『田村茂の写真人生』新日本出版社、1986年、p.83

<sup>5</sup> 田村茂「あとがき」『わがカメラの戦後史』（新日本出版社、1981年）p.133

者の問題に至るまで、戦後日本が抱えていた社会的現実を記録し発表していた。

1960年（出版月不明、写真集の内容からして7月以降出版と予想）、日本共産党から『日本人民の勝利への前進——安保反対闘争記録写真集』が出版される。この写真集には、1959年3月にあった安保条約改定阻止国民会議の結成の直後から、新条約案の成立、またその結果としての岸内閣の総辞任、そして最終的には池田内閣の発足に至るまでの期間における、一般市民による安保反対闘争の道程を記録した写真が収まっているが、それらの写真撮影に関わっていたのが、田村茂と『アカハタ』の写真部員であった。安保闘争を経る過程で、田村、そして彼と撮影をともにしていた『アカハタ』の写真部員をはじめ、民主的で革新的な路線を志向する新聞社及び通信者の写真部員により「七社会」が結成される。結成の理由は、当時強まった取材妨害に対し、報道の自由を守る構えを強めるためであった。七社会は、58年の警察官職務執行法改正案が提出された頃、情報交換や取材協力のため、『アカハタ』、『アジア通信』、『機関紙通信』、『朝鮮新報』、『ジャパン・プレス・サービス』の各社写真部の撮影者、編集者によって結成された「五社会」に、『アカハタ・ニュース』、『電波ニュース』が加わった団体であった<sup>6</sup>。

この七社会は、基本的には親睦会の性格が強く、年に何回か親睦会をしていたようだ。1963年の忘年会で、田村は「もっと民主的な写真をつくろうじゃないか」との提案を投げ、彼の提案に共鳴した人々により、同年12月27日、七社会を母体（朝鮮新報は入らない）に事務室を銀座にあった高速道路ビルのジャパン・プレス・サービス内に設けて「写真集団」が創立されることになる<sup>7</sup>。会長には田村茂が選ばれ、発足時の会員数は、写真家・小西久弥や岸本正義などを含めた40名であった。

## 2. 2. 「日本リアリズム写真集団趣旨」について——「写真集団」が追求する価値と活動

「写真集団」発足から約1ヶ月後となる64年1月20日には、早くも「写真集団」の機関紙第1号が発行されるが、それに掲載された「日本リアリズム写真集団趣旨」【図1】からは、この団体が自らをいかに自己規定し、どのような理想や目的を掲げているかが明確に窺い知れる。また同時に、会費や組織運営に関する情報も読み取ることができる。少々長いですが、全文引用することとしよう。

日本リアリズム写真集団は、写真による真実の報道を通じて、日本の独立、民主主義と世界平和をめざす撮影者、編集者、評論家、愛好家の自主的な大衆組織である。

集団は、すぐれた民族文化の伝統と内外の撮影技術の成果を共に学び、表現の自由を守り、文化の反動化に反対し、大衆のなかでその生活と闘いをいきいきと反映するように励ましあい、識見を高め、大衆のために奉仕する。また国際的視野に立っ

<sup>6</sup> 小西久弥「発足当時のところ」『写真リアリズム』35号、1973年10月、p.85

<sup>7</sup> 田村茂、前掲書『田村茂の写真人生』、p.289

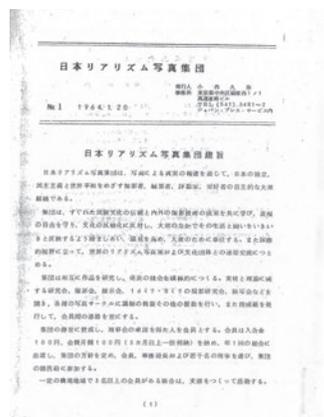
て、世界のリアリズム写真家及び文化団体との連帯交流につとめる。

集団は相互に作品を研究し、発表の機会を積極的につくる。実技と理論に関する研究会、撮影会、展示会、16ミリ・8ミリの撮影研究会、映写会などを開き、各種の写真サークルに講師の斡旋とその他の援助を行い、また機関紙を発行して、会員間の連絡を密にする。

集団の趣旨に賛成し、理事会の承認を得た人を会員とする。会員は入会金100円、会費月額100円（3ヶ月以上一括前納）を納め、年1回の総会に出席し、集団の方針を定め、会長、事務局長および若干名の理事を選び、集団の諸活動に参加する。

一定の職場地域で3名以上の会員がある場合は、支部をつくって活動する。<sup>8</sup>

「真実の報道」、「日本の独立、民主主義と世界平和」、「表現の自由」、それから「文化の反動化に反対」などといった価値は、「日本ジャーナリスト会議」（1955年発足）、また「文化団体連絡会議」（1964年発足）など、広く戦後、革新的で民主的な組織を標榜する団体において共有されていた内容でもある<sup>9</sup>。それらの価値を趣旨に明記している「写真集団」の政治的スタンスが十分に予想できよう。なおその他、趣旨に記された内容で注目すべきは、同集団が、たとえば日本写真家協会のように職業団体を目指さず、プロやアマを問わず、写真に携わっている者すべてに門戸を開いていたという事実である。これこそ、第一に「写真集団」が掲げていた民主主義の理想が、反映されているととらえられよう。



【図1】「日本リアリズム写真集団趣旨」『リアリズム写真集団機関誌』1号より抜粋

### 2. 3. 活動・事業概略：初期活動について

それでは「写真集団」は具体的に、どのような活動を行っていたのか。筆者は2017年5月以来、「写真集団」の事務局のご厚意により、直接同集団にて何度か機関誌を中心に資料調査させて頂く機会を得た。その成果を含め、以下記載していこう。ここではまず、「写真集団」の創立から体制を整えていく初期の活動（2年間）を中心に、同集団がいか

<sup>8</sup> 『日本リアリズム写真集団』第1号、1964年1月、p.1

<sup>9</sup> たとえば、「文化団体連絡会議」の会則第一条（1）の「日本文化の反動化に反対し、文化の民主的発展と普及、思想、表現の自由のためにたたかいます」や、第一条（3）にみられる「日本の平和と独立・民主主義と生活を守り」といった価値や活動目標から、「写真集団」の追求する方向性との親和性を読み取れるだろう。ちなみに、「写真集団」は1964年4月に「文化団体連絡会議」に参加し、常任理事団体となる。文化団体連絡会議『文化運動便覧1968』文化団体連絡会議、1968年、p.5

に規模と体制を拡大・強化していき、なお自集団の存在を写真界内外に知らせたかを確認する。続く2. 4. 活動・事業概略：主な事業については、「写真集団」が展開していた活動や事業全般を簡略にカテゴライズして確認することで、より立体的な把握を試みることにする。

### 1950年代リアリズム写真運動との合流——「私の京都・写真まつり」

「写真集団」は1964年1月20日に機関紙を刊行することで、本格的に活動を展開し始める。その後、1964年2月18日から3月1日まで東京都美術館で開かれた「第17回 アンデパンダン展」に、「写真集団」名で写真【図2】を出品し<sup>10</sup>、同集団の存在を世に知らせる。メーデーなどに対し集団撮影を行う一方、4月には、設立したばかりの「文化団体連絡



【図2】 第17回アンデパンダン展における集団の出品作の模様（『写真リアリズム』178号より抜粋）

会議」に加盟し常任理事団体となり、また7月には日本原水爆被害者団体協議会に加盟する。そのほか、中国撮影学会やベトナム写真家協会と国際交流を深めるなど、「写真集団」は、国内外にネットワークを形成していく<sup>11</sup>。

規模の点においても「写真集団」は素早い成長を見せていた。65年1月に行われた第1回総会の時点で、会員数は200名を超え、支部も沖縄を含め、20支部に発展しており<sup>12</sup>、1965年9月には、発足当時の約10倍となる、445名まで会員数が増加していた。

発足からわずか2年が経たないうちに、これほどまで多様な活動と規模の拡大を成し遂げた「写真集団」であるが、己の存在感をさらに高める2つの出来事が起こる。その出来事とは、50年代のリアリズム写真運動を牽引していた土門拳と木村伊兵衛の、リアリズムの2大巨匠が「写真集団」に加わったこと、そして1965年10月9日、10日の両日間に京都で開催された「秋の京都・写真まつり」を、「写真集団」が主催したことである。

まず、土門と木村による「写真集団」への入会について触れておこう。先に写真集団に入ったのは木村であった。彼は1964年9月、中国での撮影のために出国する前に「写真集団」の事務局に訪れたが、その際に入会の意を伝えている。木村は、「これから皆さんといっしょにリアリズム写真のことを勉強するつもりです。また私で多少ともお

<sup>10</sup> 『日本リアリズム写真集団』第2号、1964年3月、p.3

<sup>11</sup> 原水協への加盟については、『日本リアリズム写真集団』第4号、1964年7月、p.4を参照。写真集団と海外写真団体との交流については、『日本リアリズム写真集団』第5号、1964年10月、pp.2-7に詳しい。

<sup>12</sup> 『写真記録 1963-1983 日本リアリズム写真集団20年の歩み（『写真リアリズム』178号 創立20周年記念号）』1983年6月、ページ数無し。

役にたてるならば、集団のためにつくしたいと思います」<sup>13</sup>と入会の弁を述べているが、写真会の大先輩であり、土門とともに、リアリズムの代名詞的存在である木村の入会は、写真のリアリズムをめざす集団にとっては、心強くかつ嬉しい出来事であっただろう。

一方の土門は、木村が入会した翌年の65年6月に入会している。土門の甥で、リアリズム写真運動の当時、土門の写真やリアリズム論を時には批判するなど、リアリズムをめぐる言説空間を形成する役割を担った写真評論家の伊藤知巳は、この年の10月に京都にて開催予定の「私の京都・写真まつり」で行われる「写真文化講演会」の講師役を頼みに土門を訪れる。そこで伊藤が土門に「写真集団」への入会を勧めたところ、土門より即座に許諾を得たのであった<sup>14</sup>。50年代のリアリズム写真運動は、土門により触発された現象であり、彼は誰よりもリアリズムそのものを象徴する存在であることは言うまでもないだろう。その意味で、土門の入会は、リアリズムを冠する「写真集団」にとって、自分たちの存在意義を補強させる事件そのものであったと言えるだろう。そして「写真集団」の発足から1、2年の間、土門や木村のほかにも、仏像写真を主に撮っていた藤本四八や、戦後派の写真家集団であるVIVOのメンバー・丹野章などの写真家のほか、伊藤逸平や永田一脩といった編集長および評論家など、日本の写真界において名の知られた顔ぶれが、「写真集団」に入会していた。そのみならず、文芸評論家・中島健蔵といったいわゆる写真界外部のビックネームも「写真集団」に加わるようになり、同集団には、写真界内外の著名人が揃うようになっていく。

続いて、「写真集団」の存在感を内外に示したもう一つの出来事である「私の京都・写真まつり」について確認することとしよう。この催しは、「集団の〔引用者注：発足してからの〕1年8カ月（ママ）の成果に立って、また洋々たる展望のもとで、すぐれた専門家と、全国の活動家、一般愛好者の大交流の場として企画したもの」<sup>15</sup>であったが、「写真集団」の第2回総会も兼ねていたため、全国に散在する会員が集まる会となっていた。1965年10月9日と10日の2日間の日程で、京都の文化厚生会館や教育文化センターを会場として行われたこの催しでは、まず9日に第2回総会のほか、①「写真運動の組織」、②「写真の本質とリアリズム」、③「カメラワークと暗室処理」、④「組写真展示法」をテーマとした各種研究会、それから、土門拳や木村伊兵衛、中島健蔵などの講師陣による「写真文化講演会」が開催された。そして2日目となる10日は、京都各地での撮影会が行われ、その後は日中青年大交流会に参加していた写真家・英伸三らの帰国報告会がなされた。

ここで注目したいのは、この催しに寄せられた、写真界の内外からの期待の高さと注目度である。1日目の第2回総会では、立命館大学総長の未川博による来賓挨拶がなされ、「日本ジャーナリスト会議」、「日本写真批評家協会」有志からのメッセージや、「日本写

<sup>13</sup> 「木村伊兵衛氏 集団に入会」『日本リアリズム写真集団』第5号、1964年10月、p.7

<sup>14</sup> 伊藤知巳、丹野章、目島計一、田中雅夫、伊藤昭一、田村茂「座談会 日本リアリズム写真集団の10年のあゆみと展望」『写真リアリズム』35号、p.86

<sup>15</sup> 小西久弥「臨時総会と写真まつりについて」『現実と写真』9号、1965年9月、p.6

真家協会』、『カメラ毎日』など、写真界内外の組織から祝電が寄せられた。また同日に行われた「写真文化講演会」の冒頭の挨拶は、京都府知事であった蜷川虎三が行っていた。写真界において名の知られた組織からの祝典や、大学や政界の来賓が参加したことからも窺い知れるように、「写真集団」の位相とその活動は、「私の京都・写真まつり」の開催に際して、対外的にも十分に知られ意識されるようになっていたのである。

以上が、「私の京都・写真まつり」に関する大まかな説明であるが、諸催しの中で、本論で特に注目したいのは、9日の「写真文化講演会」にてなされた土門の講演内容である。「私のリアリズム」と題された講演で、土門は、自身が推進していった50年代のリアリズム写真運動の反省点を告解するかのようには話している。そして彼は、自分への反省を踏まえ、「写真集団」と当時のリアリズムにどのような思いを抱いているかを述べることで、50年代の自分と60年代の「写真集団」の現在を接続させるのである。



【図3】「私のリアリズム」の公演中の土門拳（『写真リアリズム』178号より抜粋）

ほくは、昔、リアリズム、リアリズムと朝から晩までいって、アマチュアをだましたような時代があった。

ほくだけでなく、ほくの影響をうけたようなアマチュアが、みな乞食みたいなものばかり撮ったんです。それで「リアリズム」イコール「乞食写真」ということになって一部の批評家や保守的な写真家から、土門のリアリズムは乞食写真だと悪口をいわれた。その辺りからリアリズム運動にいきづまりがきた。それで僕は妙な停滞を感じたものだから、第1期リアリズムは終わったと活字にして宣言したんだ。第1期とか第2期とか、そんなことはどうでもいいんだけど、とにかくやりきれなくなってそうだったわけです。

しかしいまになって反省してみると、ほくの提唱自体は正しかったと思うんだけども、自分の身近に集ったファンみたいなアマチュア2、30人を中心にして動いていただけで、それを組織化し得なかった。それはほくの力の弱さもあるし、1つの時代の流れということもあってやむを得なかったんだけど、いま反省してみれば日本リアリズム写真集団のような、こういう正しい組織へ運動の方向を据え得なかったということが、第1期リアリズムは終わったとしてほくが逃げ出すよりしようがなくなった一番大きな原因じゃないかと思うんです。

ほくは日本リアリズム写真集団がどうして生れたか、そういうことはちっとも知らないけれども、今日こうして大勢の熱心な方々に会ってみると、10年余り前をふり返ってみて非常に感慨無量なんです。なんてうまくやっているんだろうと思って

……。実は、自分でははっきり意識できなかったけれども、今日ただいまのこういう状況こそが、本当はぼくがかねがねイメージとして描いていたことなんです。<sup>16</sup>

〔傍線引用者〕

50年代のリアリズム写真運動を振り返り、その限界や反省点を自らさらけ出した上、土門は、リアリズムを集団で追求しようとする「写真集団」のあり方を、50年代リアリズム写真運動の際、自らがイメージしていた理想が具現化されたものであると述べる。ここに来て「写真集団」は、50年代のリアリズム写真運動を牽引した張本人より、リアリズムという名を冠するにふさわしい、いわば後続人としての正当性を承認されたのである。そして、土門自身も「写真集団」に入会することで、同集団がリアリズムという名のもとで理想として掲げていた、「写真による真実の報道を通じて、日本の独立、民主主義と世界平和をめざす」ための活動に、支援を惜しまず、携わるようになっていく。

ここまで確認したように「写真集団」は、その初期活動において、土門拳や木村伊兵衛という従来のリアリズムの巨匠たちを構成員として加えることで、リアリズムを名乗る組織としての正当性を確保し、また写真界内外の著名人を含む会員数や支部数を飛躍的に拡充するなど、組織としての体制を鞏固なものとした。なお、またこの期間中に、機関誌もより改善されることとなる。タイプ印刷による活字だけのザラ紙12枚でスタートしていた機関誌は、7号（1965年3月31日刊行）からは、題名を『現実と写真』とし、活字のみならず写真も掲載されるようになる。さらに10号（1965年12月10日）からは、現在までも「写真集団」の機関誌の題名となっている『写真リアリズム』へと再び名称が変更され、体裁も内容もより充実したものとなるのであった。

ここまで見てきたように、2年という短期間において「写真集団」は、国内外の諸文化団体とのネットワークを形成し、また会員と支部を拡大しつつ機関誌も改善するなど、さらなる跳躍のための基盤づくりを成し遂げていたのである。

## 2. 4. 活動・事業概略：主な事業について

ここでは「写真集団」が展開していた活動・事業のうち、持続性があったものを中心にいくつかの範疇に基づいて紹介する。それにより同集団の活動の内実を、簡略ながらも体系的に把握することができるだろう。

### 1) 撮影：共同制作

「写真集団」では、集団で同じ対象を撮る撮影会も行なわれていたが、共通のテーマ（たとえば、メーデーの撮影）を複数人が共同で議論し、調査・企画・撮影・編集を行う、共同制作という営為を頻繁に試みていた。複数人が討議を重ねることを前提とする

<sup>16</sup> 土門拳「私のリアリズム」『写真リアリズム』第10号、p.9

「共同制作」という制作手法は、「写真集団」が掲げていた「民主主義」という価値とも親縁性を見せるものと考えられよう。

## 2) 展覧会関連

### ①展覧会への参加

「写真集団」は発足してすぐの1964年より、日本美術会主催の無審査・自由出品の美術展「日本アンデパンダン展」に集団として初参加し、1975年まで毎年参加している。

### ②展覧会企画・開催

支部ごとに自主的に展覧会が開かれるほか、「写真集団」では、1974年より新人選抜展である「風」展〔第1回目は7月20日～26日の期間に富士フォトサロン（東京）で開催〕を、1976年からは公募写真展である「視点」展〔第1回目は、6月13日～6月25日の期間に東京都美術館で開催〕を企画・開催している。特に「視点」展は、現在まで続いており、「視点」展の選考委員には、同集団の会員のみならず、ゲスト選考委員として、東松照明（第25回）や細江英公（第29回）などの著名な写真家も参加している。

## 3) 教育

### ①講演会

「写真集団」は総会及び例会などの機会に、会員向けの講演会を実施している。それは撮影技術の向上や表現の研究など、写真に関係するものばかりではなく、たとえば「第10回原水爆大会」〔講師は金子満広、1964年6月2日本部例会〕や、「日本の農村と日米安保条約」〔講師は美土路達雄、1970年2月23日本部例会〕など、当時の社会現実を知るためのものもあった。つまり、写真に関する教育とともに、その写真の対象となる社会的現実への教育についても、「写真集団」は目配りをしていたのである。

### ②写真教育

#### ・夏期講座

この講座は、各支部の中から、今後中堅幹部として活動する写真活動家の育成を目的としたもので、コースは、暗室実技や創造についての討論会、撮影実技と合評会で構成されていた。1回目は、1967年7月22日～24日に東京総合写真専門学校で開催され、全国の45支部から74名が参加している<sup>17</sup>。1986年（第20回）まで継続。

---

<sup>17</sup> 『写真リアリズム』16号、1968年2月、p.45

#### ・現代写真研究会

従来の本部例会を改名した催しである。「写真集団」の会員を含め、東京近郊の写真愛好家を対象として行われた研究会で、1971年6月から1972年4月まで、ほぼ毎月開催された。撮影技術や写真作品分析などのテーマを設定し、集団内外の写真家を講師と設けている。

#### ・JRP塾

写真活動家を育成強化するAコースと、すでに専門家として活動している者や専門家を目指す者を対象とするBコースにより構成された写真教育コースを設け、1971年4月26日に開講されている。(2年間持続されているように見受けられる)

#### ・現代写真研究所

1974年5月10日に開設された「写真集団」付属の「現代写真研究所」は、写真家・評論家などの講師陣により、マンツーマンで写真を指導する学校であり、現在まで存続している(所在地は、東京都新宿区四谷3丁目東京都新宿区四谷3-12沢登ビル5階であり、「写真集団」は同建物の6階に位置)。

#### ・その他の活動

上記の他に各地方や支部ごとに写真教室が開かれるなど、「写真集団」は、集団内外の人を対象に、写真教育を活発に行っていた。また、機関誌には写真投稿欄を設け、会員に写真を発表できる場所を提供するとともに、プロの写真家・評論家による選評が与えられることで、会員の撮影技術や表現の向上が図られた。

### 4) 出版物

#### ①機関誌

「写真集団」の機関誌は、1964年1月20日に第1号が出されて以降、2021年現在に至るまで刊行が続いている。1号から6号までは、『日本リアリズム写真集団機関誌』という題名で、ザラ紙にタイプ印刷による活字だけが入っていたが、7号(1965年3月31日刊行)からは、題名が『現実と写真』へ変更され、活字のみならず写真も掲載されるようになる。10号(1965年12月10日)からは、赤色のカラーの表紙となり、現在までも「写真集団」の機関誌となっている『写真リアリズム』へと題目が変更される。赤表紙の『写真リアリズム』は33号(1972年10月31日)まで続き、34号から45号までは黒表紙に変更された上、枚数もかなり増幅するのみならず、写真も多く掲載されるなど、質量とも、に進展を見せるようになる。ただし45号(1980年2月)以降は、機関誌と会員向け便り「JRPニュース」を一つとし、『写真リアリズムnews』(1980年2月～1981年7月)を刊行するようになる。

それ以降、再び『写真リアリズム』（1981年9月～）へ改題されるなどの変化が加わるが、34号から45号に見られていた「写真雑誌」並の量と質は、見られなくなる。

機関誌の体裁や価格、構成、記事などの詳細については、付帯資料「リアリズム機関誌1号-45号：政治への関わりを中心に」をご参照いただくこととし、ここでは、表紙が付き、書物としての形態を持つようになった7号以降の機関誌に共通する特徴について、最小限の情報のみを記しておくこととする。



【図4】機関誌の変遷過程  
(写真は筆者の所蔵品より)

- ・判型：B5判（182mm×257mm）／・表紙と裏表紙に写真あり
- ・構成：目次、論考及び座談会などの記事、写真、会員向け便り（集団及び交流の  
他団体）、会員による投稿写真、編集後記など
- ・定価：11号より価格が付く

## ②写真集・図録

個人会員による写真集や図録を取り上げると、膨大な数になるため、ここでは「写真集団」として出版していた写真集および図録への言及に留めておくことにする。まず現在にまで刊行が続いているものとして、先に言及しておく必要があるのは、写真公募展「視点」展の図録である。その他、特記すべき写真集としては、「写真集団」の長崎支部の会員による共同制作写真集『長崎の証言』（1970年刊行）である。後述する「写真集団」に関する研究の論点でも触れるが、「写真集団」において、共同制作は、課題として検討、実践されており、同写真集はその見事な成果の一つであるため、注目に値する。

## 2. 5. 国内外の写真団体及び民主的大衆団体とのネットワーク

「写真集団」が構築していたネットワークは、決して写真界に限定されるものではなく、同じ政治的スタンスを追求する国内外の団体と、幅広いネットワークを形成していた。代表的なものだけを述べておくと、国内では「日本ジャーナリズム会議」や「文化団体

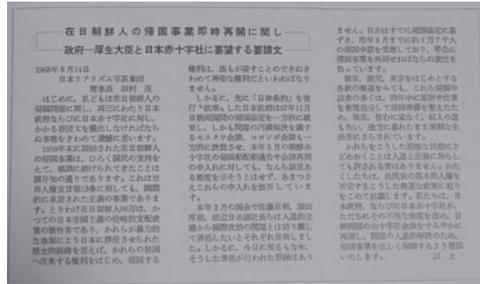
連絡会議」などの民主的団体、なお、国外では、「中国撮影学会」や「ベトナム写真家協会」などと交流していた。

## 2. 6. 政治への関わり

「写真集団」は声明・決議文を出し、また政党運動に関わるなど、いわゆる「政治活動」へ積極的にコミットしていた。

たとえば、「在日朝鮮人の帰国事業即時再開に関し、政府一厚生大臣と日本赤十字社に要望する要請文」<sup>18</sup>【図5】を、政府や日本赤十字社宛に提出したり、1967年の東京都知事選挙にあたって、日本社会党と日本共産党から推薦されていた美濃部亮吉を当選させるべくして結成

された「明るい革新都政をつくる会」に、唯一の文化団体として参加し、支援活動も行っていった。このように「写真集団」は、自分たちが掲げていた理想を踏まえ、写真の創作活動のみならず、直接行動という形をもって、政治的活動を行っていたのである。



【図5】「在日朝鮮人の帰国事業即時再開に関し、政府一厚生大臣と日本赤十字社に要望する要請文」『写真リアリズム』18号、p.45

## 2. 7. アーカイブの実態：機関誌（1号～45号）を中心に

現在、国会図書館や東京都写真美術館の図書室、またその他の大学や地域の図書館を含め、「写真集団」の機関誌1号～45号のすべてが所蔵されているところはない。特に1号から6号までのザラ紙状態の機関誌については、管見の限り、所蔵している図書館がないため、アクセスが困難である。

## 2. 8. 会員について

「写真集団」の会員は、同集団趣旨にも示されている通り、「撮影者、編集者、評論家、愛好家」など、プロとアマチュアを問わない、様々な層の人々によって構成されている。

ここでは、「写真集団」のうち、中心的な人物を簡略に確認するとともに、写真家会員に対しては、系統的な分類を試みると同時に、その特徴を示すこととする。

### 1) 中心人物

「写真集団」の会員のうち、プロ写真家及び評論家を中心に、中心的人物を簡略に取り上げると、以下の人物を確認することができる。

<sup>18</sup> 『写真リアリズム』18号、1968年9月15日、p.45

- ① 写真家：田村茂、土門拳、木村伊兵衛、藤本四八（1911-2006）、  
小西久弥（1912-1982）、八木下弘（1920-2008）、川島浩（1925-2003）、  
丹野章（1925-2015）、目島計一（1927-1995）、英伸三（1936-）、  
中村梧郎（1940-）、嬉野京子（1940-）など
- ② 評論家・編集者：永田一脩（1903-1988、写真家でもある）、伊藤逸平（1912-1992）、  
伊藤知巳（1927-1986）、田中雅夫（1912-1987）など
- ③ その他：中島健蔵（1903-1979、文芸評論家）など

## 2) 構成員の系統的分類（写真家を中心に）

会員のうち、特にプロの写真家に関しては、以下の3つの系統に分類することが可能である。

第一の系統は、戦前・戦中からすでに写真家として活動をしていた者で、戦中は国家の戦争遂行に直接的または間接的に協力していた「報道写真家」である。同集団の生みの親であり、長年理事長を務めていた田村茂やリアリズム写真運動を牽引した土門拳、またリアリズム写真の2大巨匠の木村伊兵衛などは、最も代表的な人物である<sup>19</sup>。これら、戦中の「報道写真家」は、戦後に入ってから、50年代のリアリズム写真運動の期間中のみならず、その後においても、平和と戦争反対の姿勢を見せるようになり、「写真集団」の活動においてはその姿勢が一貫して見受けられる。

第二の系統は、戦前・戦中は写真家として活動しておらず（あるいは年齢上幼かったがために、まだ活動ができず）、50年代のリアリズム写真運動の影響を経て、「写真集団」に参加した写真家である。『カメラ』に写真を投稿し、入選の経験を持つ目島計一や伊藤昭一、河又松次郎などが、その代表的な人物である。

第三の系統は、50年代のリアリズム写真運動の当事者ではないものの、「写真集団」の活動趣旨に賛同し、会員になることを決めた写真家である。中村梧郎、嬉野京子などを挙げる事ができよう。

## 3. 「日本リアリズム写真集団」研究のための論点について

ここまで私たちは「写真集団」に関する先行研究の動向を踏まえた上、学術的研究においてはまともに論じられてこなかった同集団の歴史の実態を、確認してきた。本節では、その内容を参照しつつ、「写真集団」を研究対象とするに際して、考えるべき論点を提示する。

---

<sup>19</sup> 田村、土門、木村のみならず、戦中の報道写真家の多くが、国家の戦争遂行に協力していた。白山真理の著書『<報道写真>と戦争1930-1960』（吉川弘文館、2014年）では、報道写真家が戦争協力へいかに歩んでいたか、なお、国家が写真家をどのように利用しようとしたかが示されており、写真家の戦争協力について考える際に、示唆を与えている。写真家の本人による戦争責任に関する言及については、同書のpp.451-467を参照されたい。

### 3. 1. 田村茂という写真家へのフォーカス

「写真集団」に関する研究を試みる際、田村茂への着目は必要不可欠である。彼は「写真集団」の生みの親であるのみならず、同集団の創立以来、選出制度を経ているにもかかわらず、常にリーダー役（創立時は会長、それ以降は理事長）を担ってきた人物であった。「写真集団」の創立から、自らが死去するまで集団の中心人物であった田村の活動は、同集団の活動そのものと、直接リンクしているところが多く、その意味で、集団を研究する際には、彼の活動に注目する必要がある。たとえば、田村茂は「写真集団」の友好団体であった、「日本ジャーナリスト会議」の会員でもあり、「写真集団」のネットワークの構築においても、重要な働きをしていた。このように、彼の足跡を追うことは、「写真集団」をよりよく理解するためには、まずなされなければならない作業である。

それだけではない。田村への着目は、50年代のリアリズム写真運動を多面的に理解するためにも有効である。田村茂は、リアリズム写真運動当時から、己の写真人生の最終章に至るまでリアリズムを呼びかけ続けており、彼にとってリアリズムは、いわば戦後における写真人生の指針そのものであり、実際その写真の質もきわめて高い。そのような彼の活動から私たちは、従来の土門リアリズムへの再解釈及び再評価を試みることができるのみならず、50年代のリアリズム写真運動と、60年代における「写真集団」の新しい写真運動の関係性を確認することもできる。このような理由からも、「写真集団」に関する研究のためには、彼の存在に着目しなければならないのである<sup>20</sup>。

### 3. 2. 土門拳の位相について

上記の3. 1. 田村茂という写真家へのフォーカスとも関係するが、「写真集団」を研究する際に重要な論点として取り組むべきは、土門の「写真集団」での活動を通して、写真家としての彼の歩みとそれに対する評価を対象化することである。

戦後日本写真史におけるリアリズムを論じる際、土門が避けることのできない存在であることを否定する者はいないだろう。このような土門の位相を考慮した際、「写真集団」に彼が入会をし、どのような活動をしていたかを確認することは、彼にとってのリアリズムが何であったかのかを理解する意味においても、大事な作業であると思われるが、不思議にも、この手の作業は行われていない。

土門拳は、戦前戦中の報道写真家としての活動から、戦後のリアリズム写真の実践に至るまで、写真を以て社会的現実——つまり、戦時下の情勢と敗戦後の負の状況——へコミットメントすることを目指していた。その都度、彼は国家のために、民族のために、（被爆後の広島撮影の際には）一般国民と被爆者の連帯のためという具合に、時代

<sup>20</sup> 筆者は田村茂を媒介とし、土門が主導していた50年代におけるリアリズムを再評価し、「写真集団」と50年代のリアリズムが、どのように結合されていくかについて論じた別稿をすでに用意している。詳細については、そちらを参照していただきたい。

や状況に合わせて、自分（の写真）を役立てる具体的な対象を必要とし、その対象と同化することを希求していた。つまり、彼は「自分よりも他人のこと、世のなかのことを憂え、憤り、喜ぶ精神の豊かさがみちみちている写真」<sup>21</sup>を追求し続けていたのである。そして、彼における、他人や世の中のための写真の役立て方は、「大政翼賛」の国民の一人」<sup>22</sup>として、あるいは「日本民族の一人として」<sup>23</sup>、戦争への協力と反対といった、正反対なゴールを大真面目に目指すという帰結をもたらしたのである。

土門の戦中と戦後の写真家としての歩みにみられる、断絶と見受けられうる変化を踏まえ、写真研究の領域では、彼の戦後のリアリズムを、戦中の振る舞いに対する反省や、戦争責任の取り方と解釈する傾向もあった<sup>24</sup>。

土門自身が、戦争協力について反省の言を述べてはいないため、リアリズムの追求を、戦争責任の取り方であるにとらえる解釈自体、実は想像の域を出ておらず、妥当性を認めることには限界があると、筆者は考えている。とはいえ、戦後の土門は、戦中と同じ写真表現の質を有しながらも、前述したとおり、写真を役立てようとする対象を変え、平和と民主主義の価値を志向しようとしていた点で、意識の変化があったことは確かであると言えよう。

土門の写真家としての歩みに対する評価の現状を考えた際、「写真集団」へ入会してからの土門の活動は、実は彼の思想や政治的立場をより実証的に「歴史化」するための判断材料を提供しているという点において、注目する必要がある。それにより、私たちは、土門における50年代のリアリズムが何であったかについて再考する契機を得られるのみならず、また彼におけるリアリズムが、どのように「変遷」していったのか、その「歴史」を俯瞰することも可能となるためである。

### 3. 3. 写真史の内部と外部を越境する「写真集団」の位置評価

「写真集団」の活動が、写真表現の変遷過程としての戦後写真史においてのみならず、学術的な写真研究の対象として圏外に置かれてきたことについては、すでに冒頭で述べた通りである。

写真史において、「写真集団」が対象とされなかった事実を踏まえ、「写真集団」を考察するためにどのような土台の確保が必要であるかを考えることは、「写真集団」の研

<sup>21</sup> 土門拳「自己閉鎖的写真と自己開放的写真」『写真作法』ダヴィッド社、1976年、p.53

<sup>22</sup> 土門拳「呆童漫語（三）」『フォトタイムズ』1940年10月号、p.51

<sup>23</sup> 土門拳「フォトジェニックということ——或る傷兵の写真について——」『カメラ』1953年6月号、p.157

<sup>24</sup> 典型的な研究の一つとして、長谷川明「土門拳『ヒロシマ』——戦争責任としてのリアリズム」『写真を見る眼 戦後日本の写真表現』（青弓社、1995年）を挙げることができよう。彼は、「日本の写真界は戦争責任の問題をすべて「迂回」してやりすごしたと言われる。たしかにほとんどの写真家も評論家も、戦前戦中における自分たちの言動については頬かむりしてとおしたと言ってよいだろう。土門もまた公式には自己批判はもちろん、反省の言ももらしていない。しかし、写真家としての反省はリアリズム運動の中に明確に見てとることができる。これが彼の戦争責任の取り方だったのだ、と私は思う」（pp.34-35）とし、土門のリアリズムの追求を、戦中の活動に対する反省としてとらえていた。なお、長谷川明流の解釈や評価は、現在までも続いている。

究においては、方法論の観点から重要視すべき論点となる。その際、一つの方法論として考えられるのは、「写真集団」の活動をあえて写真史の領域に限定してとらえようとせず、実際に集団が行っていた活動の性質と特徴を考慮し、該当する関連領域の視座から、「写真集団」の活動をとらえなおすことである。「写真集団」の活動や存在意義は、写真史や写真界という特定の領域に限定されておらず、ジャーナリズム史や、政治運動史、大衆文化史など、他領域とも関係する部分があるため、それらの領域の視座から「写真集団」を考えない限り、「写真集団」を立体的にとらえることは難しい。そのため、「写真集団」の研究には、写真史や写真界とその他の複数の領域へ越境と複眼的視座が、必要不可欠であろう。

#### 1) 政治運動史と写真史の間：「写真集団」の政治的アイデンティティーを手掛かりに

「写真集団」について考察する際、考えなければならないことの一つは、同集団の政治的なスタンスを、どのように規定することが妥当であるかということである。この問題について検討を試みる際に参考になるのは、写真評論家の重森弘淹による、「写真集団」への評価である。結論を先にいうならば、重森は、「写真集団」を日本共産党の傘下にある組織であると単純にとらえる節があった。なぜ重森は、「写真集団」に日本共産党の文化制作の一環として組織されているという、レッテルを貼ることになったのだろうか。

#### 重森弘淹による「写真集団」への評価

重森弘淹は1967年2月に刊行した著書『写真芸術論』所収の論文「写真のリアリズムについて」において、「さいきんふたたび、日本の写真界ではリアリズム運動が活発になりつつある」<sup>25</sup>とし、1960年代半ばの写真界にて、リアリズムを推進しようとする動きが見受けられているとの現状認識を示す。その上、彼は1950年代のリアリズム写真運動に触れるところから、「写真集団」の現状の評価を試みていくのであるが、1950年代のリアリズム写真運動の限界を以下のように指摘していた。

この運動〔筆者注：リアリズム写真運動〕は実のところ写真雑誌に依拠していただけで組織をもたなかったし、また土門拳独力の個人的指導という点で一種の流派的枠組みから抜け出すことができず、本質的には運動としての体裁と規模をそなえるまでにいたらなかった。<sup>26</sup>

<sup>25</sup> 重森弘淹『写真芸術論』美術出版社、1967年、p.178

<sup>26</sup> 前掲書、重森弘淹『写真芸術論』p.180

私たちはすでに、土門が50年代のリアリズム写真運動において、組織が結成されなかったことを限界として自覚していたことを確認しているが、重森も同様の認識を持っているのであった。続いて彼は50年代のリアリズム写真運動のもつ是と非を簡略にまとめてから、「写真集団」による新しいリアリズム写真運動を取り上げる。

さて、1963年12月、「写真による真実の報道を通じて、日本の独立、民主主義と平和をめざす撮影者、編集者、評論家、愛好家の自主的な大衆組織」として「日本リアリズム写真集団」が結成され、急速に組織を拡大した。しかもその組織的な活動という点では、かつてのリアリズム運動よりも着実にダイナミックであった。

ところで、この集団が日本共産党の文化政策の一環として組織されていることについて、疑いを挿む余地はない。山下文男の「写真運動の現実と当面する課題——日本共産党の写真政策の確立のために」（『文化評論』1965年・10月号）を読むと、その事情はますます明白である。<sup>27</sup>

重森は、「写真集団」によるリアリズム写真運動が組織的であり、50年代の時よりも着実にダイナミックであると評価するも、同集団が日本共産党の文化政策の一環として組織されているとし、その証拠として引用文中の山下論文をあげている。しかしながら、重森は、本文では山下文男の持つ写真への理解やリアリズム観の安直さを指摘するのみで<sup>28</sup>、なぜこの論文から、「写真集団」の組織が日本共産党の文化政策の一環であることがわかるかについては、根拠を示していない。それでは、山下論文においては実際、その理由が示されていたのだろうか。

結論を先取りすれば、山下論文において、「写真集団」が日本共産党の文化政策の一環として組織されたという経緯や情報は示されていない。同論文で山下は、（日本共産党の言う）米日反動勢力へ対抗するための文化政策を、写真の分野でも掲げる必要があるとの趣旨のもとで、写真愛好者サークルの組織作りなどを課題とする、民主的写真運動を提唱している。その際、山下は「写真集団」を取り上げて、「現在日本に存在する唯一の進歩的、民主的な写真団体」として評価した上、「集団がかかげている目標と活動、その組織方針は、民主的写真運動をすすめるうえで同集団が積極的な役割を果たすことを保証するものである。したがってわれわれは、日本リアリズム写真集団の活動を重視しなければならない」とし、日本共産党がすすめるべき写真運動という課題の同伴者であり、一つの見本として、集団の意義を見出しているのである<sup>29</sup>。山下は、職場

<sup>27</sup> 前掲書、重森弘淹『写真芸術論』p.181

<sup>28</sup> 前掲書、重森弘淹『写真芸術論』、p.183を参照。重森は「モダニズムとアヴァンギャルドの無原則的な同一視や、「一日瞭然」を写真の本質だとするあまりにも素朴で、しかも理論的に頹廢そのものでしかないリアリズム観に唾然とするほかない」とし、山下における写真への理解やリアリズム観を批判している。

<sup>29</sup> 山下文男「写真運動の現状と当面する課題——日本共産党の写真政策の確立のために」『文化評論』1965年10月、48号、p.34

や地域ごとに、無数の写真愛好者組織を作り、それを連携する中核として「写真集団」を位置づけるのが正しいとの論を展開するが<sup>30</sup>、ここで山下は、「写真集団」が上記の役割——つまり、各写真愛好者サークルの中核組織——を成しうるだけの体制を有しているとの判断を下し、日本共産党が推進すべき写真運動において、「写真集団」とどのような関係を構築すべきか、その将来の可能性を、個人的見解として検討しているのである。したがって山下論文においては、「写真集団」が日本共産党の文化政策の一環として組織されたと断言できる要素は、重森の発言とは異なり、示されていないのである。

「写真集団」の会員には、日本共産党員である田村茂をはじめ、日本共産党と近い距離にいた人物がいたのは事実であり、同集団の活動には、たとえば「明るい革新都政をつくる会」の支援活動など、日本共産党の方針と共鳴するものもあった。だが筆者には「写真集団」が、その活動内容からして、日本共産党の政治綱領を追随していたとは考え難い。そして多くの会員は、日本共産党に対する支持やシンパシーを理由に、「写真集団」に加入したのではなく、「写真集団」が掲げた価値への共鳴や時代認識があったからこそ、入会していたと考えられ<sup>31</sup>、日本共産党の傘下に、「写真集団」を位置づけるのは早計な判断と言わざるをえない。このような理由からわかるように、当時の時代状況や政治的文脈を考慮するとともに、具体的な資料に即して「写真集団」の政治的アイデンティティを考察することが、「写真集団」を正しく理解するための課題であるといえよう。また「写真集団」のような民主的文化団体の活動を、今度は政治運動史の領域へと視座を変え、その中でとらえなおすことを試みると、「写真集団」の政治的アイデンティティをより多面的にとらえることが可能ではないかと考えられる。

## 2) ジャーナリズム史と写真史の間——「写真集団」と報道写真

「写真集団」の写真家の多くは、基本的に、国内外の社会問題を撮影し、それを世の中に発信するという意味の「報道写真」に携わっていた。同集団の創立経緯を説明する際に触れた通り、創立メンバーの多くは、新聞社などのジャーナリズムの領域で活動していた写真家であった。つまり、芸術としての写真表現を目指すというよりは、伝えるべき事柄を報道する写真を追求していた写真家が、中心となっていたのである。そして、会員のプロ写真家の多くは、写真界を自分の居場所としながらも、自分たちの写真を世間一般へ発信することを重要視していた。「写真集団」の会員のうち、田村茂、土門拳、

<sup>30</sup> 前掲論文、山下文男「写真運動の現状と当面する課題——日本共産党の写真政策の確立のために」pp.34-35

<sup>31</sup> 2008年12月に行われた「写真集団」の座談会「JRP発足と写真の今日を考える」では、集団の発足前後やその後の急速な会員拡大にふれ、次のような回想が述べられており、当時の入会状況を想像してみることができる。「身近の話を言うと、集団が作られたという新聞報道があって、岩下守さんは、朝見てすぐジャパンプレスに飛んでいったっていうんだよね。そういう人が全国にたくさんいたと思う（関次男）」、「民主的文化団体っていうだけで心動かされる人も、当時はたくさんいたんでしょうね（中西篤行）」。

尾辻弥寿雄・関次男・中西篤行・中村悟郎・英伸三・金瀬胖（司会）「JRP発足と写真の今日を考える」『写真リアリズム』271号、2009年8月20日、p.24

木村伊兵衛、目島計一、丹野章、中村悟郎などは、「日本ジャーナリスト会議」の会員でもあり、ジャーナリストとしての写真家と評することのできる立場にいた。

ちなみに、上で確認した重森の論稿において、「写真集団」が日本共産党の文化政策の一環として組織されているとの疑惑が示されていたのだが、一方で重森は、「写真集団」が結成されたほかの要因を、当時の時代状況に触れつつ次のように想定していた。

日本リアリズム写真集団の結成にはそれなりの要因があったし、今もある。国際的にはベトナム動乱にみられる世界戦争への危機、米中対立、中ソ対立、AA諸国での民族解放革命、中国核ミサイル実験などの極度な流動的情勢。国内的には安保体制強化、独占資本の成長と合理化、それにともなう不景気、また公害問題、農村の荒廃といった情勢にたいする写真家の危機意識が集団結成に踏み切らせているのである。<sup>32</sup>

重森は「写真集団」の結成の一つの要因として、国内外の情勢に対する写真家の危機意識を取り上げているが、実際これらの社会問題について、「写真集団」の会員は、写真と政治活動の両面——また、それが一体された形により、積極的に関わろうとしていた。ところが、このような活動自体は、作家論や作品論、写真表現論に支えられている写真史においては、一部の著名写真家を除いて、あまり注目されることはなかった。

「写真集団」の会員が、己の写真活動を写真界に限定せず、より広く報道することを心掛けており、いわばジャーナリストとして仕事をしていたことを考えると、ジャーナリズム史の領域からも「写真集団」への着目があるのではないと思われるかもしれない。しかしながら、管見の限り、そのような試みはほとんど見当たらない<sup>31</sup>。「写真集団」の活動は、写真界とジャーナリズムの両領域に関係していたのであり、その考察においては、2つの領域を同時に俯瞰する必要があるだろう。そしてこのような試みから、「時代にかかわる写真家」の意義について、新しい観点を考える契機が得られるのではないかと、筆者は考えている。

### 3. 4. 写真表現・対象・撮影意図・制作手法——政治と写真——

#### 1) 写真表現と対象をめぐる——写真が目指すもの

「写真集団」が、写真に携わる組織であることを考えれば、同集団により生み出された写真そのものについて考えることは、当然必須のこととなろう。そして、その写真が、社会的現実の改善や、政治運動を強く志向するものとなると、必然的に、政治と写真の関係、論点として考えなければならなくなるだろう。

<sup>32</sup> 中村悟郎「写真は何を伝えたか」、日本ジャーナリスト会議60年史編纂委員会『JCJ賞受賞作で読み解く真のジャーナリズムとは』所収、2016年、pp.123-125には、日本リアリズム写真集団の結成について触れている。

60年代半ばの時点において重森は、同集団の写真について「事実において、集団の作品の質は決して高くはない。ごく一部のプロフェッショナル会員を除いては決して高くはない」<sup>33</sup>と批判を加えていた。同時期に、機関誌へ投稿される会員の写真を見れば、表現としては、50年代のリアリズム写真運動の際に写真雑誌へ投稿されていたアマチュア写真に類似したものが見受けられる。つまり、対象を見たままにシャープに写し取る、ストレート写真が主流をなしているのである。社会的現実を知らせることを追求する「写真集団」であるからこそ、ストレート写真が、主要な表現方法として意識されているのは予想できるが、確かに類型的な写真が散見されるのは事実である。機関誌の選評では、会員の投稿写真において、構図や露光、印画、被写体と背景の関係、そして撮影意図など、表現に関わる内容への評価と指摘がなされ、さらなる改善が促されていた<sup>34</sup>。

実を言えば「写真集団」内部においても、会員の写真の質を向上させることは課題となっており、本論の「2. 4. 活動・事業概略：主な事業について 3) 教育」で紹介されたような写真教育——プロの写真家・評論家による研究会の実施、各種写真講座、機関誌の写真投稿欄【図6】による指導など——が、様々な内容と形式で試みられていた。「写真集団」の第9回総会（1972年2月26日～27日）において、集団のスローガンが「創造と運動」に採択されたのも、同集団にとって写真の表現や創作面が重要視されていたことを裏付けているといえよう<sup>35</sup>。



【図6】会員による写真投稿欄の一例（『写真リアリズム』21号、p.63より）

また「写真集団」の写真に関しては、撮影対象（内容）や撮影者の問題意識をめぐって批判的な評価が加えられることもあった。『アサヒカメラ』1969年4月号に掲載された「コンボラかりアリズムか」と題された座談会では、参加者の一人である写真家・中平卓馬より、「写真集団」に向けての苦言が呈されている。中平卓馬は、「日本リアリズム写真集団の写真には、二つしかないんですよ。中小企業の倒産か、それともハチマキして手をあげてる写真か、それしかない」<sup>36</sup>とし、写真の内容や題材が類型化していることを批判した。それに対し、「写真集団」の会員である嬉野京子は、「そんなことないですよ。たまたま日本リアリズム写真集団の写真で知られているのが、ハチマキをしめてる写真とか、倒産の写真なんで、そういう誤解が生じているじゃないかと思う」といい、直近で開催されていた展覧会に触れては、「家族とか子どもとか、教育問題、民族芸能など、ずいぶん多面的なものが出たん

<sup>33</sup> 前掲書、重森弘淹『写真芸術論』美術出版社、1967年、p.184

<sup>34</sup> たとえば、『写真リアリズム』18号（1968年9月15日）に掲載された阿部龍男（荒川支部）の写真「滅びゆく漁場」（2枚組写真）に対する丹野章の選評を参照されたい。

<sup>35</sup> 『写真リアリズム』178号、1983年6月18日、ページなし

<sup>36</sup> 嬉野京子・桑原史成・高梨豊・中平卓馬・新倉孝雄「座談会 コンボラかりアリズムか——新しい写真表現の可能性をさぐる」『アサヒカメラ』1969年4月号、p.235

ですよ。けっしておっしゃるようなものではないということを、強調しておきたい」<sup>37</sup>とし、「写真集団」が多様な対象や問題にも取り組んでいると反論した。

ここでは特定の対象をとらえること、いわば対象の類型化が問題になっているのであるが、「写真集団」が社会問題に積極的に取り組んでいることを考えると、撮影対象の重複が生じるのは、ある程度は理解できる。しかしながら、写真をもって社会問題をどう視覚化するかに関しては、より多様な表現と対象への取り組み方を検討する必要があるのも当然である。そして嬉野の反論をうけ、中平は、今度は写真の政治化に関する議論に進んでいく。

日本の、戦争中の写真は、みんなハチマキしてますよ。りりしい顔をしてね。アジアの解放のために、という名のもとに、そういう写真ばかり撮ったわけですよ。つまり一種の価値の、倫理の解説であり、イラストレーションであったわけです。それとまったく同じようなことが再びぼくらの間からなされたならば、すごく大きな間違いをしてしまうんじゃないか。一つの意味——それが社会主義革命ということでも、あるいは聖戦遂行ということでも同じだけれども、その一つの意味を至上価値としてしまって、それをわかりやすく解説するというだけ心がけたとき、結局真実とはウラハラのものが生まれるんじゃないかという気がする。<sup>38</sup>

戦中における、聖戦遂行の意思を視覚化した写真と、戦後のデモをとらえた写真とを、同じ組上に載せて同一化することには、留保が必要である。その是非はさておき、中平の言葉からは、遂行すべき至上価値が先に存在し、写真がそれを補強する道具として使われることに対する問題提起を読み取ることができよう。つまり彼は、意識的な写真の政治化に、警鐘を鳴らしているのである。

中平の提起は、「写真集団」が制作する写真の意義を批判的に考えるためにも、また、写真と政治との関係一般を思惟するという意味においても、示唆するところがある。このように、「写真集団」の写真は、いわば創造としての写真と政治運動としての写真という緊張関係を生んでいるのであり、そのような写真をどのようにとらえ評価すべきかが、喫緊の論点となるのである。

## 2) 制作手法としての「共同制作」

「写真集団」では、個々人による写真实践とともに、複数人による「共同制作」にも重きが置かれていた。一つのテーマに対し、複数人による企画、討議、撮影、検討などが伴われる「共同制作」は、1950年代半ば頃から、大学の写真部の活動で注目されてい

<sup>37</sup> 同前

<sup>38</sup> 同前、p.235

た手法である<sup>39</sup>。「写真集団」の活動において、「共同制作」による作品制作や議論は、頻繁に行われており、集団の長崎支部の会員により出された写真集『長崎の証言』（長崎原爆被災者協議会、1970年）は、その代表的な成果として考えられる。「共同制作」という制作手法は、同集団が掲げていた「民主主義」という価値との親近性を有しており、それが持続的・意識的に行われていた事実を踏まえると、「写真集団」にとって「共同制作」という手法がいかなる意味を持ち、それにどのような可能性が見出されていたかを考察することは、「写真集団」の理解につながると思われる。

#### 4. おわりに

以上のように本稿では、学術的論文としてははじめて、「写真集団」の歴史の実態の呈示と方法論的再定義を試みた。具体的には、まず「写真集団」研究の対象とされなかった先行研究の現状を指摘し、1960年代から1970年代までの期間を射程にいれ、同集団の創立の経緯を始め、展開していた事業や活動を複数のカテゴリから確認することで、同集団の歴史の実態を、なるべく多面的かつ立体的に提示しようとした。さらにその上、「写真集団」の研究に必要な論点として、田村茂や土門拳といった人物の活動に対する考察や再評価とともに、写真史の内外から「写真集団」の位置評価を試みることで、それから、同集団の写真や制作手法の分析から、写真と政治の関係性を考えることを提示した。そして、それらの論点を考察することで得られる成果を、展望と課題という形で示すことを試みた。

もちろん、その外にも「写真集団」を論じるための着眼点や問題系は、存在するはずであるが、それについては、本論で提示した論点に併せて、取り組むべき今後の課題としたい。本論と、その後に予定されている筆者の作業を通して、「写真集団」を研究するための土台を早急に整備する時機が到来したと考えている。

#### ・謝辞

本論は、「写真集団」での資料調査なくしては、日の目を見ることはなかった。調査を許可して下さった「写真集団」の事務局の皆様へ、この場を借りて、成果をすぐにお届けできなかったお詫びとともに、心からの感謝を申し上げたい。

---

<sup>39</sup> 金子隆一「行為として写真——全日本学生写真連盟の成立と最初の変革」『日本写真の1968——1966～1974 沸騰する写真の群れ』展カタログ（東京都写真美術館、会期：2013年5月11日～7月15日）、東京都写真美術館、2013年、pp.178-179を参照すること。

《主要参考文献》

【一次資料】

・機関誌

『日本リアリズム写真集団機関誌』1-6号（1964年1月20日-12月20日）

『現実と写真』7-9号（1965年3月31日-9月30日）

『写真リアリズム』10-45号（1965年12月10日-1980年2月8日）

『写真リアリズム』178号、1983年6月18日

『写真リアリズム』271号、2009年8月20日

・その他

土門拳「児童漫語（三）」『フォトタイムス』1940年10月号、pp.51-52

土門拳「フォトジェニックということ——或る傷兵の写真について——」『カメラ』1953年6月号、pp.157-159

土門拳『写真作法』ダヴィッド社、1976年

嬉野京子・桑原史成・高梨豊・中平卓馬・新倉孝雄「座談会 コンボラカリアリズムか——新しい写真表現の可能性をさぐる」『アサヒカメラ』1969年4月号、pp.228-235

田村茂『わがカメラの戦後史』新日本出版社、1981年

田村茂『田村茂の写真人生』新日本出版社、1986年

【二次資料】

山下文男「写真運動の現状と当面する課題——日本共産党の写真政策の確立のために」『文化評論』48号、1965年10月、pp.28-37

重森弘淹『写真芸術論』美術出版社、1967年

『文化運動便覧1968』文化団体連絡会議、1968年

長谷川明『写真を見る眼 戦後日本の写真表現』青弓社、1995年（1985年）

岡井耀毅『土門拳の格闘 リアリズム写真から古寺巡礼への道』成甲書房、2005年

阿部博行『土門拳 生涯とその時代』法政大学出版局、2007年（1997年）

飯沢耕太郎『戦後写真史ノート 写真は何を表現してきたか』岩波書店、2008年（中央公論社、1993年）

金子隆一「行為として写真——全日本学生写真連盟の成立と最初の変革」『日本写真の1968——1966～1974 沸騰する写真の群れ』展覧会カタログ（東京都写真美術館、会期：2013年5月11日～7月15日）、東京都写真美術館、2013年、pp.178-182

白山真理『＜報道写真＞と戦争 1930-1960』吉川弘文館、2014年

中村悟朗「写真は何を伝えたか」、日本ジャーナリスト会議60年史編集委員会『JCJ賞受賞作で読み解く真のジャーナリズムとは』所収、2016年、pp.118-144

竹葉丈編『「写真の都」物語 名古屋写真運動史1911-1972』展覧会カタログ（名古屋市美術館、会期：2021年2月6日～3月28日）国書刊行会、2021年

（本学副手）

【資料集】

リアリズム機関誌1号-45号：政治への関わりを中心に

※本資料は、「日本リアリズム写真集団16年の歩み」(『写真リアリズム』45号、pp.146-168)と『写真リアリズム』178号(創立20周年号)を参照しつつ、機関誌各号の「JRRPニュース」に記載された「政治運動」関連の催しの記録を、筆者が直接確認を行った上、紙幅の関係上、主要なものを中心に作成したものである

10～33：赤表紙時代  
34～45：黒表紙時代

号数	機関誌名	発売日	特集・企画(テーマ)および重要記事	政治への関わり	備考
1号		19640120	田村茂「発足にあたって」		
2号		19640315	第17回アンデパンダン展特集		
3号		19640530	田中雅夫「リアリズム写真集団の若い写真家達に」	抗議： デジタル軍事クーデタ当局の中国人記者らの逮捕について	
4号	『日本リアリズム写真集団機関誌』	19640730	石少華「生活に深く入ることについて私の体得」	抗議文： 「韓国」政府への講義(注：言論人弾圧に対して)	
5号		19641015			
6号		19641220	「木村伊兵衛・田村茂対談」		
7号		19650331	第18回 アンデパンダン展関連写真及び記事多数		・『現実と写真』と改題 ・初の写真掲載(8項)と表紙写真、本文36ページ
8号	『現実と写真』	19650731	座談会特集「ベトナム戦争写真をめぐって」	集会参加： 「ベトナム侵略反対・日韓条約批准阻止・国民共同行動の中央集会」に、一部会員参加	
9号		19650930	写真・土門拳「筑豊の子供たち」		

作成＝李範根

号数	機関誌名	発売日	特集・企画（テーマ）および重要記事	政治への関わり	備考
10号	『写真リアリズム』	19651210	土門拳「私のリアリズム」	集会参加： 11月26日「日韓条約粉碎」中央集会へ、 田村茂をはじめ、執行部一部参加	・『写真リアリズム』と改題 ・文字デザインは、高橋錦吉
11号		19660301	田村茂「新しい写真運動」		・副題に「新しい写真運動」が付く ・定価：120円
12号		19660601	伊藤知巳「理論と創作活動強化についての当面の課題」	要望書在日朝鮮人の民族教育を守るための要望書（政府宛）	
13号		19660901	丹野章「全写真人の力で著作権を確立しよう」	傍聴在日朝鮮人帰国協定問題に関する国会外務委員会を傍聴（伊藤智己、伊藤昭一）	
14号		19670101	特別座談会「明日への写真運動のために」	・講義国家権力のスパイ活動に抗議——土門拳顧問ら7氏よびかける	
15号		19670430	土門拳「写真とは何か」	・決議文 2月26日「沖縄小笠原返還を要求し、日本リアリズム写真集団沖縄支部への連帯・支援を強化する決議文」 ・政党選挙の支援 3月16日：「明るく革新都政をつくる会」発表式 JRPが唯一の文化団体として幹事会に選出される 担当幹事・伊藤智己（九段会館）	
16号		19680215	田中雅夫「写真におけるリアリズムとは何か」	・集会 7月9日：板村、砂川で基地拡張防止、基地撤去の集会 ・行進 8月4日：第13回原水禁世界大会平和行進参加	
17号		19680615	伊藤知巳「確信にみちて、さらに“新しい写真運動”の前進を」	街頭募金 4月13,25,26日：ベトナム人民支援の街頭募金——数寄屋橋で日美会と共同行動	

号数	機関誌名	発売日	特集・企画（テーマ）および重要記事	政治への関わり	備考
18号		19680915	田中雅夫「もういちど写真運動の意義を考える」	要請文 8月14日：「在日朝鮮人の帰国事業即時再会に関し政府―厚生大臣と日本赤十字社に要望する要請文」	
19号		19681130	伊藤逸平「“新しい写真表現”ということについて考える」		
20号		19690225	田中雅夫「リアリズムとリアリズム写真運動に関する問と答え」	声明文 2月18日「JRP宮崎達カメラマンに対するリンチ事件について」の声明文	・創刊5周年記念特大号
21号		19690530	特集 ポートレート6人集	声明文 5月10日：「大学立法にたいするわれわれの態度」	・定価：200円へと変更
22号		19690831	特集 風景10人集		
23号	『写真リアリズム』	19691130	特集 群像14人集	集会 10月21日：安保廃棄・沖縄全面返還などの要求をかかげた、統一行動	
24号		19700228	特集 クローズアップ		
25号		19700531	特集・国会周辺		
26号		19700825	桑原史成、英伸三自選作品	集会 6月23日：「安保破棄・平和・中立・生活保護をめざす全国統一行動中央委員会」	
27号		19701130	特集 首都東京	集会 沖縄の国政参加選挙勝利・生活保護をめざす10・21全国統一行動	
28号		19710225	共同制作「観光化のすすむ沿岸漁業―一福浦港」		
29号		19710731	島本圭助の風景写真		・副題の「新しい写真運動」がなくなる
30号		19711131	パークホワイトとユージン・スミス		

号数	機関誌名	発売日	特集・企画（テーマ）および重要記事	政治への関わり	備考
31号		19720226	漁村と農村の生活		・第9回総会より、集団スローガンが「創造と運動」となる（72年2月）
32号		19720531			・定価：250円へ変更
33号		19721031	田村茂「カメラに賭けた50年 フレームへの挑戦」		
34号		19730225	創立10周年記念特集号		・スローガン「創造と運動」が目次へ表示 ・機関誌から“写真雑誌”へ（JRPの自己評価） ・定価：500円
35号		19731001	土門拳 文楽・戦争と写真、10年のあゆみ	声明文： 小選挙区制反対「声明」	
36号	『写真リアリズム』	19740615	田淵行男 まぼろしの蝶を追って	決議文： 「京都府知事選挙勝利、利権川民主府政の継続発展をかちとる特別決議」	・定価：700円
37号		19741220	座談会「木村伊兵衛先生を語る」		・定価：650円
38号		19750401	田中徳太郎 私の心を開いてくれた白さ ぎたち	要望： 「補助金の交付改善の要望」	
39号		19751010	中村悟郎 ベトナム、生きぬいた人々		
40号		19760125	特集 終戦から昭和45年まで		・第一回「視点」展公募要項
41号		19760813	土門拳 室生寺・富山治夫 現代語感		
42号		19770215	特集 第一期リアリズム写真運動写真		
43号		19771225	桑原史成自選作品	要請 ・文化庁へ、全国的な写真教室への助成を要請	
44号		19780810	島海悦朗 存在、筋ジストロフィー症の仲間たち		・定価：680円
45号		19800208	創立16周年記念特集号		・定価：2500円